

「ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2010」の審査と中間報告

明治学院大学公認ロゴグッズの本体価格の10%を積み立て、大規模災害の被災者支援や環境保護活動に役立てようという試みが2005年秋から始まった。これが「明治学院大学ボランティアファンド」である。ボランティアファンドは2006年度より受け入れを開始し、2010年度4月には854,633円を2009年度の明学グッズ売上高の10%として受け入れた。2010年度は過年度からの繰り越しを含め2,281,956円をファンドとして運用している。

ボランティアセンターでは、このファンドを原資として、2007年度に「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称ボラチャレ）」を設立し、学内のボランティア団体や新しく活動を始めようとするグループによる企画の実現を支援してきた。初年度の2007年度は「環境保護」に関連する企画案を募集し、3企画の応募があり3企画を助成した。2008年度には助成対象を「明学生のボランティアによるキャンパスのある身近な地域での地域貢献活動」に広げ、14企画の応募があり5企画を助成した。2009年度は8企画の応募があり6企画を助成した。

2010年度も2008年度・2009年度に引き続き、「地域」「ボランティア」「明学生」をテーマとした企画を募集した。4月12日～6月4日の間に8企画の応募があり、6月19日に白金校舎にて公開審査会を実施した。公開審査会では学生や5名の審査委員（大西学長、学外の有識者として白金地域より嶋委員、戸塚地域より植田委員、原田ボランティアセンター長、浅川ボランティアセンター長補佐）を中心とする一般聴衆を前に、企画ごとに企画内容のプレゼンテーションを行った。続いて審査委員による審査会が開催され、6企画を助成企画として選定し、総額450,000円近くを助成した。6月30日には横浜校舎にて授与式を実施し、学長から受賞企画の代表者に奨励金が手渡された。

各企画は活動期間を経て、12月1日に白金校舎での中間報告会で報告した。中間報告会の第一部では受賞団体が活動の進捗状況や抱えている問題などについて発表した。発表した学生からは発表に向けて準備することで企画を見直す機会になったという感想が多く寄せられた。質疑応答では、あるグループが抱える悩みに対し、他の企画に携わっている学生から具体的な提案がなされるなど、それぞれに刺激となっている様子が見えられた。第二部では、学生が地域に関わることで何を感じ、何を学んだかを整理し、さらに深化・発展させるための気づきを得ることを目的とし、受賞団体メンバーによるグループワークを行った。浅川センター長補佐、李コーディネーター、市川コーディネーターのファシリテートのもと、活発な議論が交わされた。

中間報告会後には中間報告書を執筆し、本書のこの次のページから掲載される予定である。どんな中間報告を書いてくるのか楽しみである。さらに、各企画は中間報告会で得た気づきを生かし、活動を一層進めることとなる。最終的には5月の最終報告会での発表と活動報告書の提出が予定されている。

（森下）

「Do For とつか」

「Do For とつか」は私たち横浜学生スタッフが学生と地域の架け橋となり、戸塚区民市への参加を通して、よりよい戸塚のまちづくりに貢献しようという思いから始めた企画です。

「戸塚区民市」は西口の商店街が戸塚を盛り上げるために行っている朝市で、戸塚区役所の駐車場を使い、月に一度開催しています。学生スタッフは地域の方のお手伝いとして、物産品の販売や、人を引き付けるような学生企画を行っています。このボランティアファンドは、「戸塚区民市」での活動の発展のためにいただきました。

戸塚区民市は徐々に知名度が上がり、常連客も増えてきました。しかし、最近この区民市で課題となっていたのが、戸塚駅西口再開発に伴い以前より区民市への来客数が減り、その運営が難しい状況になっていることでした。さらに区民市を盛り上げるために考えたのが来客の年齢層を幅広くすることでした。区民市に足を向ける大半が年配の方で、子どもの数は多くありませんでした。しかし、季節に合わせて商店街が行う「雪祭り」や「夏祭り」などには子どもが多く、会場に活気がありました。2月の区民市後に行われたミーティングで「子どもが来てくれば、より多くの商品が売れるし、盛り上がるのではないか」といった声を商店街の方から聞きました。

そこで横浜学生スタッフは、地域の子どもを対象とした企画を区民市で継続的に行うことにしました。例えば大きな横断幕に季節に合ったアートを子どもたちと作製する企画をしました。3月には桜アート、4月には鯉のぼりを子どもたちの手形を使って、色を付けて作品をつくりました。5月には母の日アートと題して、折り紙でつくったカーネーションと、感謝のメッセージを書いたカードをお母さんにプレゼントする企画を行いました。

このように、一層の発展を見込む企画を行うことで、多くの子どもをひきつける区民市ができると考えました。助成金を貰った後、残念ながら8月、9月は区民市が休みになってしまい学生主体の企画を行うことができませんでしたが、10月の区民市では子どもと地域がかかわるような新たな企画を2つ立てました。

1つは宮崎の口蹄疫被害者への応援企画です。このとき、区民市は宮崎で口蹄疫の被害を受けた牧場を応援するため、宮崎の物産展を行ないました。それに合わせ、私たち学生スタッフは、子ども達にも宮崎で何が起きているのか知ってもらいたいという思いから、わかりやすく宮崎で起こったことをイラストにして、区民市の会場に貼りました。足をとめてそのイラストを観てくれる子どもも多く、宮崎で起こった厳しい状況を伝えられたかと思えます。

もう1つの企画がハロウィーンにちなんだ企画です。区民市の会場の商店街の方のお店やボランティア団体のお店を含む目印がついているい



ハロウィーン企画

くつかのブースに「Trick or Treat!!!」と子どもに言ってもらうと、お菓子をあげるという企画でした。この日はちょうど会場の隣にある戸塚小学校で幼稚園児の運動会があったため、多くの子どもが参加してくれました。初めは恥ずかしがりながらも、合言葉を言ってくれました。

このハロウィン企画により、さらに地域との交流を深めたように感じました。今までは、学生スタッフと子どもの間での企画でした。しかし、この企画は地域の方々のお店に、事前に企画を説明し、協力をしていただいたので、子どもと商店街の方がかかわる新たな企画になりました。

長く区民市に関わってきたことで、商店街と学生スタッフのお互いの絆が深まり、信頼が増したように感じます。たとえば、区民市を自由に使わせていただいたり、区民市のポスターを学生にも作らせていただけるようになったことです。そのことにより、子どもの目を意識した、ポスターを作ることができました。

また、戸塚区民市は装飾に欠けるとの意見が地域の方とのミーティングで出たので、その一部として、ボトルキャップアートの作製も進めました。いただいた助成金で板と発泡スチロールを購入し、キャップを簡単に取り付けられる板を作りました。ボトルキャップは糊や接着剤を付けると、リサイクルとして回収してもらえなくなるので、板の作製には苦勞をしました。

この用意したボトルキャップアートを活用し、12月にはクリスマスをモチーフとしたボトルキャップアートを企画しました。

現在、戸塚区民市の参加で一番の課題となっているのが、地域の方とのコミュニケーションの手段です。今までは、主に、電話とメールで意見の交換や次回の区民市の企画説明をしてきました。しかし、ポスターを学生で作らせていただいた際に行き違いがあり、地域の方が求めているデザインではないということを知りました。その後、区民市の主催の方とミーティングを開き、ポスターの方向性をどのようにするか話し合いました。地域の方の意見は、学生のポスターの全てを否定しているのではなく、高齢者の方には地域のポスターの方がわかりやすいということでした。その結果、商店街の方が作るポスターと学生スタッフが作るポスター両方を掲示することで、より幅広い年齢層の方に来客してもらえるのではという意見にたどり着きました。メールや電話だけでは、意見にずれ違いが生じる場合があるので、これからはできるだけ地域の方と直接会う形で、区民市の方向性を決定づけていきたいと思います。



区民市のポスター

「Do For とつか」により、さらに子どもに楽しんでもらえる区民市をつくれたと思います。子どもが企画に参加してくれている間に、大人が買い物をするという光景も見られたことから、区民市会場の店にもよい効果があるよう思います。課題は、やはり子どもの人数です。まだ子どもの来場は少ないので、より魅力的な企画をつくり、子どもが大人を連れてくるような区民市にしたいと思います。

(ボランティアセンター横浜学生スタッフ 国際学科国際学部2年 日高大樹)

地域密着型フェアトレードプロジェクトについて

【はじめに】

私たちは、フェアトレードの存在を広めるために戸塚地域や学内で活動している「なんとかなるさ」です。フェアトレードとは、日本語で言うと「公正取引」で、搾取や悪条件下の労働がなく、対等な関係の貿易のことを指します。私たち消費者は安いものばかりに目が行きがちですが、フェアトレードの存在を知ること、安いものには安い理由があるということがわかり、安すぎる商品には何か弊害が起きているのかもしれないという考えが沸いてきます。自分の何気ないお買い物で誰かが苦しんでいるかもしれない、それを知るか知らないかでは、消費に対する考えが変わってくると思います。そのため私たちは、フェアトレードを知り消費のしかたについて考える人を増やすべく、活動しています。このプロジェクトでは戸塚地域でのフェアトレード認知度を高めるために動いています。なぜ戸塚地域なのか？それは、校舎があり大学生が行き交う戸塚地域で私たちが地域の方とコミュニケーションをとることが楽しいからということと、大学がある街で何か地域へ大学生から発信したいと思うからです。地域住民にとっても、自分の地域の大学に活気があることはよいことだと思われ、私たちが地域に積極的に携わることで、私たちの活動もより身近に感じてもらえるのではないかと考えています。

【内容】

プロジェクトは、「パン工房 Ange とのコラボレーション強化」「地域でのイベント開催」の2本の柱で構成されています。「パン工房 Ange」は横浜校舎近くにあるYMCAのワークサポートセンターで、私たちは以前から他のボランティアサークルと合同で店頭雑貨販売を行わせていただいたり、イベントに参加させていただいてきました。その後は合同でなく独自に関わるようになり、2010年6月からは、フェアトレード商品をお店に置かせていただいています。この活動はタウンニュース戸塚版と白金通信へ掲載され、また、Angeでのパーティーにも参加させていただきました。関係をより深めるため、また、お世話になっているAngeのため、プロジェクト広報や交流に力を入れています。

「地域でのイベント開催」については、準備段階として月に一度の区民市、倉田小学校での運動会、戸塚お結び広場というイベントに参加してきました。また、白金祭においてフェアトレードを紹介する紙芝居を作成し展示しました。

【学んだこと】

このプロジェクトの2つの柱において、私たちは交流や出店など、小さな積み重ねを大事にしてきて、その大切さを実感しています。パン工房 Angeには週に1度商品管理のためにお店に伺うことで、コミュニケーションを重ね、いろいろな話ができるようになり、私たちの活動についてアドバイスやアイデアをいただきました。また、地域での活動でも、月に一度の区民市に毎回参加することで、区民市開催側の方々、足を運んでくださる地域の方々と交流することができ、他のイベントに出るなど広がりもで

きました。日々の活動は小さくても、続けていくうちになにか得るものがあるということを学びました。

【課題】

「パン工房 Ange とのコラボレーション強化」について、先日のボランティアファンドチャレンジ賞報告会のアンケートにて、「コラボレーションというより商品を置いてもらっているだけ」「もっと地域と繋がって」という意見をいただきました。本当に的を得ている意見なので、真摯に受け止め、次の活動に繋げていきたいと思っています。コラボレーションというと共同で商品開発などができたら理想なのですが、フェアトレード商品は安いとは言えないので、なかなか難しいものがあります。したがって、この先できる活動の例としては、地域新聞紙へ取材をお願いしたり、パン工房 Ange で、フェアトレード商品を試食しながら勉強会のようなものを行うなどの活動が考えられます。

また、「地域でのイベント開催」については、実際あまり動き出すことができていません。イベントにも様々な形があり、フェアトレードに詳しい方やお店の方に来ていただいて講演会をするのか、私たちが主催で勉強会を行うのか、その際どのような内容にするのか、定まっていないので考えなければなりません。また、フェアトレードを説明する簡単なゲームを考案したのですが、小学生にわかってもらえるような内容にするには非常に難しいことがわかり、失敗に終わってしまいました。これについては練り直したいと思っています。

【最後に】

私たちは現在岐路に立たされています。授業で、日常で、様々なことを学んでいくうちに、「果たしてフェアトレードが一番よい方法なのか？」という疑問が沸きつつあります。サークルの中でも、フェアトレードのよい効果をふまえた上で、「フェアトレードは所詮先進国のニーズに合わせて商品を作っているだけで、生産者のためにならない。食料を作って自給自足した方がよいのでは」という意見の一方で、「実際、貿易をして収入を得ないと子どもに教育を受けさせたり、インフラを整備することができない」という意見もあります。私たちのサークルにとってこれは非常に重要な議論であるので、真剣に話し合っていきたいと思っています。



(なんとかなるさ 社会学部社会学科3年 山口翠里)

お茶べり - Free ♥ Will -

【1. はじめに】

私たち Free ♥ Will は、インドの児童労働問題に取り組んでいる団体です。2008年に設立し、2009年度よりインドの児童労働問題を解決するというビジョンのもと、本格的に活動を開始しました。昨年度までは学内を中心に写真展やワークショップなどの啓発活動を実施してきましたが、今年度からは児童労働問題を一人でも多くの人に知ってもらうことを目的に、お茶べりという新しい企画を通して学内から地域へと活動の輪を広げています。今後は上述の活動を継続していきながら、団体の方向性を模索していく予定です。

【2. 企画の目的】

「ちょっとお茶しませんか?」…おしゃべりは、人と人が繋がりあうとき。そこにはお茶と笑顔があります。ご近所の人と、インドの子どもと、ちょっとお茶べり。」というコンセプトのもと、インドの子どもと日本人が繋がる架け橋になれば、という思いからスタートした企画です。紅茶をキーワードにインドの児童労働問題を啓発するとともに、地域の関係を深める場づくりをすることを目的としています。

【3. 企画の内容】

今回の企画で私たちは、日本でも馴染みのあるインドの紅茶に注目しました。日本が輸入する紅茶の約20%がインド産のもので、ダージリンティーやアッサムティーは日本でも有名です。その紅茶の製造過程には働かされている子どもがいるという現状もあります。そこで私たちはその現状を知ってもらい、「いつも気軽に飲んでいる紅茶にも、もしかしたら児童労働が関わっているかもしれない」ということを身近に感じるきっかけ作りをしたいと思います。そこで、私たちは今流行のタンブラーにオリジナルデザインを簡単に作成できるという特性に着目し、インドの子どもたちに絵を描いてもらい、それをタンブラーのデザインにすることにしました。商品として販売することで啓発効果を生み、得た収益は絵を描いてくれた子どもたちへの寄付金とします。

また、インドの児童労働問題は身近にある問題だからこそ自分の身近な人と共に考えてほしい、という思いから活動対象を大学のある地域としました。そこで、戸塚区民市⁽¹⁾などの地域に根ざした行事に参加し、タンブラー販売や写真展、ワークショップを実施することで、児童労働問題を啓発するとともに、地域の方々と私たち学生とが交流する場づくりをしています。

【4. 企画の経過】

9月：インドの子どもを対象にお絵かきワークショップの実施（約100人の子を対象）

（10月：タンブラーの商品開発）

10月16日：戸塚区民市にてタンブラー販売

11月1日～3日：白金祭にてお茶べりの実施（タンブラー販売、写真展）

カフェ10⁽²⁾と協力のもと出店し地域住民の方と交流

11月10日～11月22日：白金・横浜校舎図書館で写真展開催（地域行事の広報、タンブラーのPR）

11月26日～12月9日：カフェ10でお茶べり実施（写真展、タンブラー販売）

12月4日：とつかお結び広場⁽³⁾にてタンブラー販売

12月17日：善了寺キャンドルナイト⁽⁴⁾でタンブラー販売

お茶べりの実施にあたり、白金・戸塚両地域の活性化事業に携わる多くの方々と関係をつくることができました。それぞれの活動に参加するなかで、地域住民の方とおしゃべりをする機会も多くありました。白金祭ではカフェ10と協力して出店したことで、学生だけでなく地域の方々とも交流できる場となりました。また、フェアトレードの紅茶をその場で楽しめる空間を作り、より会話が弾むよう工夫しました。

【5. 地域での活動を通して得たこと】

この企画を通して、私たちは「地域に関わる明学生が少ない」ということと「地域は若い力を必要としている」ということを実感しました。白金地域の自治体の会長の「若い人の力が地域を活性化してくれるから、どんどん地域に関わってほしい。」という言葉から、地域と明学生とが関わることの大切さを学びました。また、これまでの学内だけでの活動では気づくことのなかった様々な地域の魅力を感じ、関わりがなかった人々と出会うなかで、地域には多様な人たちが関わり合いながら暮らしているのだということを知りました。

【6. 課題と展望】

これまでは主に地域の方々が主催する行事に参加する形で活動を行ってきましたが、タンブラーに関心を示す地域住民は少なく、関係を深める場づくりまでには至らないことが多くありました。その一方で白金祭では、私たちが主体的に地域の方と協力し出店したことで、啓発活動をしながらも地域の方々と深く交流できる場となったので、今後は私たち自身が開催する行事を増やしていきたいと考えています。また、タンブラーのデザインを明学生や地域の人とインドの子ども達との合作にするなど、製作過程から多くの人を巻き込めるものへと、この企画を改善していきたいと考えています。

(注釈)

(1) 戸塚ほのぼの商店会主催の戸塚区民市。学生や商店の人などが協力して毎月1回催す小さな市場

(2) メリーロード高輪が運営する、情報発信を目的とするコミュニティカフェ

(3) 市民活動団体やボランティア団体・個人が集まって活動内容を紹介するイベント

(4) 明治学院大学と関わりのある戸塚善了寺で毎年2回開催されるキャンドルナイト

(Free ♥ Will 社会学部社会学科3年 森田友希)

地域交流から国際交流の芽が生える

私たち「ぼけっと」は2008年にカンボジア学校建設を目標に設立された団体です。そして2010年の3月に念願の学校が完成し、4月からはカンボジアの子ども達に「本」を通しての教育支援「図書普及プロジェクト」(以下、第2P)を行っています。この第2Pには絵本作成、詩集作成、おはなし会、移動図書館、テキスト作成、ミニマム図書館と、全部で6つのアプローチがあり、今回の企画「地域交流から国際交流の芽が生える」はそのうちの1つの絵本作成活動の一環で横浜キャンパスの最寄りの小学校「横浜市立倉田小学校」(以下、倉田小)に行ったことが始まりです。はじめは生徒達の家にある古い絵本をいただけないか、フィードバックの授業を行えないかの2点をお願いするだけのつもりでした。この時に校長先生が『どうせやるなら子ども達のためになることをやって欲しい』と仰ってください、この言葉から私たちが考えた企画となりました。

この企画の目的は2つあります。小学校の授業や行事と、ぼけっとの活動が一緒になることで子ども達に国際社会へ対する何かのきっかけを作ること、この交流により明治学院大学と倉田小の距離が縮まりお互いの活躍の場が増えることです。そのために、授業以外にも様々な行事に参加することで子ども達との間に壁をなくそうと力を入れています。授業では、ぼけっとのアプローチの1つである詩集作成のメンバーが中心となり、カンボジアの学生と倉田小の生徒で詩集を交換することにしました。この授業は生徒達が実際に主体になれる他、詩集も手元に残るので、より楽しんでもらえるのではないかと思います。詩集の交換の経過は以下の通りです。

詩集交換の経過

8月…カンボジアにてフリースクールの生徒に詩を書いてもらい持ち帰る

9月…倉田小にて打ち合わせ 総合学習「みのり」の授業枠で5年生を対象に授業をすることに決定

第1回目授業 テーマ「カンボジアってどんな国?～カンボジアとぼけっとの活動について」

10月…第2回授業 テーマ「ぼけっとの活動紹介」

第3回授業 第2回の続きと質疑応答

授業見学 子ども達の自宅学習の発表を聞く

11月…「倉田小秋祭り」見学 5年生は「みのり」の授業の成果を発表

12月…第4回授業 テーマ「子ども達に詩を書いてもらう」

ぼけっとメンバーに詩を配付、英訳作業開始

9月の打ち合わせで子ども達にはまずカンボジアとぼけっとを知ってもらおうと決めました。9月10月の授業の結果、カンボジアに興味を持ってもらい、子ども達とも親しくなることができました。また秋祭りでは、子どもたちが想像以上にカンボジア、ぼけっとのことを調べてくれていて、メンバー一同

喜びと共に責任感やモチベーションがより強くなったことを感じました。今後は英訳の作業を慎重に行い、ボラチャレで詩集の製本代として頂いた助成金 94,500 円を責任もって使わせていただきたいと思います。

これまでの活動を通して

まず始めにボラチャレの話を持ちかけてくれたボランティアセンターの市川さんをはじめスタッフの皆様にはこのような場を与えてもらい大変感謝しています。また急な話にも真剣に耳を傾け、無作法で詰めの甘い意見にいつも向き合ってくれる倉田小の校長先生と副校長先生にも、心よりお礼を申し上げます。他にも小学校の先生方や生徒達、保護者の皆様にはとてもお世話になっております。私たちは自分達でも驚くほどのスピードでプロジェクトを進行させることができました。それは地域の皆様が私たちを受け入れてくれたからこそです。企画以外でも地域を大切にしようという気持ちを心から持てるようになりました。また授業や行事に参加することで、子どもはもちろん保護者の方とも親しくなることができ、最近では戸塚駅近くでアルバイトをしているメンバーが保護者の方に声をかけられたという話も聞きました。また、ぼけっとの活動において、偶然にも保護者の方が学内で働いていらっしゃるにより、工事の都合でミーティングの場所が取れない時に自治会館を貸し出してくれたり、絵本集めを町内に回覧板で呼びかけてくれたりとうれしい展開となっています。今、私たちが活動できているのはこのボラチャレがあったからこそかもしれません。またこういったことが私たちに強いやる気と充実感を与えてくれ、より良い授業にしたいといつも思います。ただ、現在のところ時間調整がうまくいかず、一度も倉田小に足を運べていないメンバーもいるため、少しでも早く全員がこの気持ちを共有できればと思っています。この関わりをぼけっとだけでなく、大学に拡大していければ嬉しいです。またボラチャレの素晴らしいところは、報告会などを通し、他の団体や普段は話す機会がない人との意見交換ができることにもあると思うようになりました。自分たちのような国際ボランティアの団体が、なぜ地域密着型の企画をやるのかと自分でも最初は思いましたが、人と人が交流し助け合うことがボランティアの根本なのではないでしょうか。



1回目の授業の様子 みんな手を挙げて積極的でした

(ぼけっと 国際学部国際学科3年 砂川朝暁)

白金アートミュージアム

<企画目的>

私たち MG ☆ SUZU は、港区の特別養護老人ホームの利用者の方々とアートを通して交流を行っている学生チームである。利用者さんの個性や魅力を多くの人に伝えるための発信源として定期的に展示会を開いている。利用者の方々、観に来て下さるご家族の方や地域の方、お互いに笑顔になってもらいたいという私たちの思いが込められている。これまでの活動ではホーム内の展示だったが、今回の「白金アートミュージアム」では、MG ☆ SUZU 初となる大学での展示を企画した。地域に住んでいる方誰もが気軽に訪れることができ、学生にもアピールしやすいため、より多くの方に作品を見て頂けると考えたからである。

<経過と実績>

11月24日～12月10日の期間、白金キャンパスのパレットゾーン2階にて白金アートミュージアムを開催した。開催にあたって、私たちは白金地域にいらっしゃる様々な方や施設とコラボレーションをさせて頂いた。私たち学生が地域の方と活動を共にし、展示会実現という共通の目標を持つことで、大学・地域・施設同士のつながりを強化するきっかけになると考えたためだ。主な活動先である特別養護老人ホーム白金の森をはじめ、白金ボランティアセンターや以前からつながりのあった俳人・花田春兆さんにも作品の提供など全面的にご協力頂けることになり、実現に向け準備は進められていった。さらに日頃の白金の森でのアート制作活動に加え、春兆さんが入所されている特別養護老人ホーム麻布慶福苑の利用者の方々と作品制作、NPO 法人風の子会の皆さんとの和紙制作も行うことができた。この企画を通して「多様なコラボ」が生まれたということは、春兆さんが付けて下さった白金アートミュージアムの副題「丘の学園と森の特養とのアートの出会い～そして飛び入り遠囃子。昔の狸ばやしならぬ広尾の仲間たちの共鳴の出品～」にも表れている。「丘の学園」は明治学院大学、「森の特養」は白金の森、「広尾の仲間たち」は広尾にある麻布慶福苑と花田春兆さんのことを指しており、それぞれが「アート」という手段を通して共鳴し、手を取り合うことの大切さを示している。

多くの方からの温かいお力添えがあり、白金の森の利用者の方々の作品、花田春兆さんの作品（風の子会の皆さんと作った和紙を用いた陶俳画）、慶福苑の利用者の方々の作品という、華やかな合同展示を開催することができた。しかし、その背景にはメンバーの葛藤もあった。作品の魅力を引き立たせるためにどのような展示方法が良いかメンバーで試行錯誤し、その結果、副題のイメージに合わせた森の空間を演出することになった。パーテーションを木に、机を切り株に見立て、作品にも手作りの額縁を付けたり、所々に葉っぱや動物の装飾を施すなど、メンバーのアイデアを加えながら作り上げていった。また、私たちは完成された作品だけでなく、制作過程の交流も「アート」であると捉えている。そのため、制作中のエピソードを作品と一緒に展示することで、作品に込められた作り手の思いが伝わるよう工夫をした。展示が少しでも多くの方の目に留まり、何かを感じ取って頂けたなら幸いである。

白金アートミュージアムの特別企画として、花田春兆さんをお迎えした俳句ワークショップを学内で
行なった。学生も一般の方も、初めて出会ったにもかかわらず、一緒に俳句を詠むことで楽しい時間を
共有し、笑顔で交流することができた。春兆さんの温かいコメントや参加して下さった方との会話を楽
しみながら和やかな雰囲気の中で行われたこのワークショップは、新しいコミュニケーションとしての
アートの形を私たちにを見せてくれた。参加者の皆さんから好評だったので、またこのような楽しさを共
有し、出会いを広げていけるような企画をしていきたい。

<企画を通して得た学び>

展示会を観に来て下さった方の温かい反応が何より嬉しかった。作品を観に来て下さった利用者の方々とご家族の方から、笑顔で「ありがとう」の言葉を頂けた時、活動してきて本当によかったと心から思った。展示を観るまでMG☆SUZUを知らなかった学生や地域の方が励ましの声を下さったり、作品の魅力に共感して下さる方がいたことが、活動に対するモチベーションにも繋がっている。そして今回の企画を通して、MG☆SUZUは本当に多くの方に支えられていると実感した。協力して下さった方々や施設との信頼関係が強まったことは、今後の活動において大きな財産である。また、メンバー内の絆も困難を乗り越えるたびに強まっていくのを感じていた。私たちにとって初の学内展示ということで不安もある中での企画であったが、実現できたことで自信を持ち、今後よりよい活動に繋がれると信じている。まだまだMG☆SUZUには未知数の可能性があることを期待し、向上していきたい。

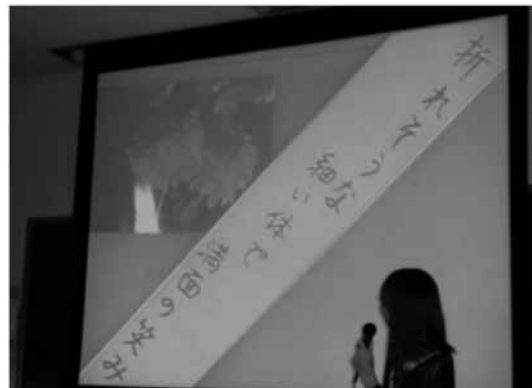
<今後の課題>

様々な方とコラボ出来たのはよかったが、周りに頼りすぎていた部分があった。白金の森、麻布慶福苑や春兆さんからの協力がなければここまでの展示はできなかつたらうし、広報活動においてはメンバーから発信したチラシや情報により足を運んだという人は少なく、私たち自身ももっと力を蓄えなければならないと感じた。準備段階での計画性のなさでは、皆様にご迷惑をお掛けしたり、慌ただしく時間に追われることが多々あった。これらの反省を生かし、今後はMG☆SUZUの活動をより多くの方に知って頂けるようアプローチを考え、余裕を持った活動を行っていけるよう工夫していきたいと思う。

(MG☆SUZU 社会学部社会福祉学科3年 外山葵)



展示会「白金アートミュージアム」



俳句ワークショップの様子

白金の魅力発見！ Deep Map

【企画内容・目的】

私たちは「明治学院大学のある白金という街で明治学院大学の学生だからこそできる活動をしたい」と思った学生有志らが集まったプロジェクトチームである。明学の輪、地域の輪を広げていくために、今後も様々な活動を通して、地域の方々と共に白金の街を盛り上げていきたいと考えている。(プロジェクトの詳細は報告書 31～32 ページを参照。)

明治学院大学の校舎がある白金地域は、一般に「セレブの住む街」や「高級住宅地」というような、新しい街のイメージが挙げられるが、私たちが白金で活動していくうちに、そういったイメージだけでなく、地元の人が経営する昔ながらのお店や、下町風情ただよう町工場なども多いことに気付いた。また、自分の地域に愛着を持つ方や、地域のつながりを大切に活動をしている人や団体など、様々な出会いがあり、地域のあたたかさを発見することができた。そこで、そんな白金の街をより多くの人に知ってもらいたいと思い、タウンマップ等には載っていない白金地域の知られざる魅力を紹介することにした。そして、2010年5月に制作・発行したのが「白金 Deep Map (以下、Deep Map)」である。ボランティアファンド学生チャレンジ賞では、Deep Map 第二号、第三号の製作費を助成していただいた。このマップを通じて白金地域の魅力を発信し、白金地域に住んでいる方々と明治学院大学の学生とのつながりの輪を広げていきたいと考えている。

【企画の経過】

現在 Deep Map 第二号の制作が進行中である。今後の予定としては3月に Deep Map 第二号を完成させ、可能であれば3月実施予定の港区青少年対策高松地区委員会主催のふれあいコンサートで配布する。イベントで Deep Map を配布するのは、直接地域の方から声を聞くことができる機会であるからだ。その後しろかねサラダのメンバーで反省会を行い、次号をよりよいものにするべく、イベントで得た地域の人々の意見をもとに Deep Map 第三号の作成を開始する。そして5月には白金志田町倶楽部主催のシロカネグローバルフェスタに参加し、Deep Map 第三号を配布する予定である。他にも白金志田町倶楽部主催や港区青少年対策高松地区委員会の主催するイベントなどに参加し、Deep Map を配布していきたいと考えている。我々がイベントなどで地域の人々に Deep Map を配布していくことで、ただ単に地域の人々と交流できるだけでなく、地域の人が白金をより深く知るきっかけになると思っている。また私たちにとっては、Deep Map に対する感想・意見を直接地域の人から聞くことで、Deep Map の技術や面白さの向上だけでなく、モチベーションの向上につながるという Win-Win の関係を築くことができると考えている。

【活動を通して得た学び・課題】

第二号のコンテンツの企画をした際、既存の雑誌やフリーペーパーとの違いが出せず、「白金のデートスポット」や「女子会コース」など、明学生でなくてもできるコンテンツではないかとコーディネーター

の方から指摘を受けた。一方で、第一号をイベントで配布した際、地域の方から「白金に住んでいるのに知らなかったことがあった」という声を聞くことができた。そういった発見は外から白金に通ってきている私たちならではの視点で、明治学院大学の学生だからこそできることであると思っている。第二号ではそれを忘れて企画をしていたように思い、プロジェクトのコンセプトでもある「明治学院大学の学生だからこそできること」という原点に立ちかえることの重要性を実感した。企画はまだ進行中なので、今後はプロジェクトのコンセプトを意識し、また地域の方からの意見や感想を聞きながら制作を進めていきたい。また、一番の課題は、我々メンバー自身が活動を楽しむことができなかつたことである。なぜそれが大切かといえば、ボランティアは世の中で必要とされているセクターを補う役割を果たしているが、同時に主催者側が活動に愛着を持つことがボランティア活動の持続に繋がるからである。

活動を自ら楽しむことができなかつた理由として、1. メンバー同士でのコミュニケーション不足、2. 活動の趣旨が曖昧なこと、3. 地域の人々からの理解が得られなかつたことの3点が考えられる。3. についてだが、Deep Map 第二号作成にあたり地域の店などにインタビューを求めたところ、何のための取材でその情報を学生がマップにする意味は何かを問われ、最終的には取材を断られてしまった。「白金の魅力を多くの人に伝える」という目的意識を持って企画に取り組んではいたが、それに協力してほしい人々が理解してくれることの難しさを感じた。これらについてはメンバーの一部で話し合い、その反省を元に今後の活動方針を確認するに至った。

【今後の目標】

このDeep Mapは学生と地域を結ぶツールとなり、我々メンバーが地域のことを一つでも知ったという証になるのではないかと考える。

そのようなフリーペーパーにするためには、まずはメンバー自らが地域のことを知る必要があると考える。そのために、空いている時間を見つけて白金地域に足を運んでみることにした。それはDeep Mapを作るための活動という意味が主ではなく、ただ単に地域のおもしろさを発見することで地域を知り、活動を楽しむための土台作りの意味で、「白金で遊ぼう」ということである。そして、結果的に地域に密着したフリーペーパーを制作できればと考える。

また、なぜここであえて「マップ」ではなく「フリーペーパー」という言葉を使っているかという点、我々はマップの概念に囚われずにマップを越えた「マップ」制作を目指しているからである。例えば、メンバーが白金の街を練り歩いた様子を描きながら地域を紹介するなどのストーリーを交えたものや、一面をすごろくにして地域を紹介する、などのユニークなフリーペーパーを制作できればと考えている。

そして、しろかねサラダのイベントで出来上がったDeep Mapを配り、地域の方へ活動を知ってもらおうと同時に、地域の方から意見を募り、Deep Mapがより良いものになるように今後の「マップ」制作に努めたい。

(しろかねサラダ 心理学部心理学科3年 本間由香・社会学部社会学科1年 山本恵理子)